
ヒナギクさんが僕で僕がヒナギクさんで

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒナギクさんが僕で僕がヒナギクさんで

【Nコード】

N7733L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ある日、僕は階段から転げ落ちた衝撃でヒナギクさんと入れ替わった。そんな僕は、街である人と再会した。その人は、十年前に行方不明となった僕の兄さんで……

1・あれ！？ ヒナギクさんと入れ替わっちゃった

それは、放課後の白皇学院で突然起こった。

横に並んで階段を降りていた金の髪留めを付けた桃色長髪の女の子が足を踏み外してしまった。

「ヒナギクさん！」

僕は彼女を助けようと、その体を捕まえ、共に転げ落ちて気を失ってしまった。

「うつ……！」

意識を取り戻した。

何かが僕の上に乗っている。

「ああ、そうか……」

僕は一緒に居た女の子……桂^{かつら} ヒナギクと階段から転げ落ちたのを思い出した。

「ヒナ……っ！？」

言い掛けて驚いた。

僕の上に、水色短髪の男の子が横たわっていた。その男の子は女の子のような顔をしており、女装させたら凄く可愛いだろーと思った。

「——って、誰だよこの人！？」

「うつ……」

男の子が意識を取り戻し、徐に起き上がった。そして、僕の顔を見て驚く。

「何で私が二人居るの！？」

「……？」

僕は疑問視した。

「——って、あれ？」

目の前の男の子は綾崎^{あやさき} ハヤテ……僕自身だ。
まさかと思い自分の体を改めると、僕は赤の服とピンクのスカート

ト姿だった。これは白皇の女子制服である。

僕は理解した。一緒に転げ落ちたショックで僕とヒナギクさんの意識が入れ替わってしまったのだと。

僕の体に入ったヒナギクさん、元いハヤテも気付いたらしく、僕に訊いてきた。

「もしかしてそこに居るのはハヤテくん？」

しかし僕は目を点にしてみせた。

「はあ？」

「え？」

「何寝ぼけてんのよ。ハヤテくんは貴方でしょ？」

「うん？ ……あれ？」

ハヤテは酷く混乱してしまった。

「えっと……」

ハヤテは転げ落ちる前の事を思い出そうとする。

「確か、私たちは一緒に転げ落ちたのよね。それで気を失って、気が付いたら私とハヤテくんの体が入れ替わってて……けど、その前はハヤテくんの隣に居た筈なんだけど」

「何をバカな事を言ってるのよ。そんな漫画みたいな事が現実にかかる訳ないでしょ。落ちた時に頭でも打ったんじゃない？」

「そうかな？」

ハヤテはどうも納得いかない。

「どうでも良いけど、早く退いてくれない？」

「え？ あ、ゴメン……」

ハヤテが僕の上から退いた。

僕は起き上がり、落ちている鞆を二つ取る。

「どっちが私の？」

僕は鞆の中を調べ、自分の物が入っていたそれをハヤテに渡した。

「さ、帰るわよ」

僕はヒナギクさんの鞆を手に階下に降りて下駄箱へ向かう。だが、ハヤテが付いて来ない為、立ち止まって振り返った。

「何してるの。置いてくわよ？」

「あ、うん……」

ハヤテが階段の踊り場から降りてくる。

「ねえ。貴方、ヒナギクを演じてるって訳じゃないよね？」

見透かされたような言動に僕はギクリとした。

「な……何言ってるのよ！？ 正真正銘、私は生徒会長の桂 ヒナギクよ！」

「じゃあ私は誰？」

「あ……貴方はハヤテくんよ。おじよ……ナギの執事のね」
バレたかな。

「そつか。一時的に可笑しくなってるだけよね。今日は早く帰って寝る事にするわ」

ハヤテはそう言つと、下駄箱でヒナギクさんの革靴に手を伸ばした。

僕はハヤテを蹴り飛ばした。

「何するのよ!？」

「貴方のは一番右端！ これは私のなんだけど!？」

「あ、ゴメン。どうも私がヒナギクのような気がして……」
間違つてはいない。

なぜ僕がこんな事をするのかと言つと、ヒナギクさんになりたいからだ。

「心配だから家まで付いてくわ」

僕は上履きを脱いで下駄箱に入れると、取り出したヒナギクさんの革靴に履き替えた。

ハヤテが僕の革靴に履き替える。

「ハーヤー太くん」

そこに現れたのは、何やらニヤニヤと笑みを浮かべている少女……

…瀬川 泉せがわ いずみだった。

「泉!？」

「ほえ？」

素っ頓狂な声を上げる泉さん。

「ヒナちゃん、ハヤ太くんが私を呼び捨てにしたよ」
中身はヒナギクさんだからね。

「泉、ハヤテくんは何の用かしら？」

「うん、今日はY o u T o b eの活動があるから呼びに行こうと思
ってたの。部長のワタルくんが自主映画を制作するんだけど、ヒナ
ちゃんも来る？」

「いや、私は……」

ハヤテが僕を見る。その目が「フォローしてくれ」と言っていた。
「行ってみようかしら」

「じゃあ部室で待つてるから直ぐに来てね」

泉さんはそう告げると足早に去っていった。

僕はハヤテを連れて動画研究部の部室へ向かった。

部室には既にメンバーが集まっていた。

「何でヒナギクが来るんだよ！？」

金髪ポニーテールの小さな女の子、三千院^{さんぜんいん} ナギが驚いた。

彼女は僕のご主人様で、僕はその執事だ。

「泉に誘われたからよ」

「何だ、そうだったのか」

ナギお嬢様は納得すると、ハヤテの方を向いた。

「ハヤテ、良い報せだぞ！」

「え？」

「ワタルが撮る映画の主演にお前が選ばれたんだ！　そしてヒロイ
ンは——」

「当然、私よね？」

「む？　なぜ部外者のお前がヒロインに選ばれるのだ。ヒロインは
この私に決まっている！」

「私にその役を譲りなさい。さもなければ……！」

僕の手元に木刀……正宗が飛来した。

「ちよつと待て！　分かった！　お前にやらせてやるから暴力だけ

はやめる！」

僕は正宗を強制送還した。

「あ……あの、映画ってどんな作品なんです？」

そう訊ねるのはハヤテだ。

「恋愛物だ。いじめられっ子の主人公が転校生の女の子に助けて貰って恋に落ちると言う——」

「普通逆じゃない？」

「五月蠅い！ これで良いんだよう！」

ナギはそう言っていると脚本を取り出した。

「それは？」

「映画の脚本。私が書いた」

「ナギに面白い話を書けるのかしら？」

「何だと!？」

僕はお嬢様から半ば強引に脚本を奪い取った。

「こら、勝手に取るな！」

怒るお嬢様を尻目に僕は脚本を読み始めた。

2・休日の学校で

休日の白皇学院。教室には撮影に協力してくれたクラスメイトたちと金で雇われた某映画製作会社の撮影隊がスタンバイしていた。

ヒナギクさんである僕は、黒板の前に立っている。そしてその右隣に居るのは、担任教師役の薫^{かある}京ノ介先生だ。^{きょうのすけ}

薫先生は先日、ヒナギクさんの実の姉……桂^{かつら}雪路^{ゆきじ}と入籍したばかりだ。その姉もまた、白皇の教師であるが、今日は休みの為に来ていない。

「おいヒナギク!? セリフはどうした!」

僕にヒロインの座を奪われて監督に回ったお嬢様がメガホン越しに叫んだ。

「あ! えつと……、潮見高校から来た桂 ヒナギクです。よろしくお願いします」

そう言っ僕がお辞儀をすると、お嬢様の「カット!」がかかった。

「ヒナギク、そこは北神^{きたがみ}遥^{はるか}だろうが……」

「ああ?」

僕はお嬢様を睨め付けた。

「うつ……まあ良い。このまま行くぞ!」

ヒナギクさんの表情に怯えたお嬢様はついオツケイしてしまった。^{ぼく}
「じゃあ次は休み時間の撮影だ! トイレに行こうとした転校生が廊下の窓から見える校舎裏に先輩に虐められてる主人公を見つけるシーン!」

撮影隊が教室から出て行く。僕もそれに続き、女子トイレに向かう姿を回されたカメラに撮^{うつ}す。

「うつん?」

校舎裏に虐められている主人公、元いハヤテを発見した。^{せがわ}
いじめっ子役には、同じクラスの瀬川^{こてつ}虎鉄^{こてつ}が選ばれて……え!?

僕は咄嗟に窓を開けると、校舎裏の虎鉄さんの前に飛び降りた。

「……………」

虎鉄さんが振り返る。

「桂！？ まだ出番じゃねえだろ！」

僕は無言で虎鉄さんの顔面を殴ってやった。

「ぶわっ！」

蹣跚めく虎鉄さん。

「僕に近寄るな」

「はあ？ 何を訳の分かんねえ事を言ってるんだよ」

「ふん！」

虎鉄さんの金玉に膝蹴りを放つ。

「ぬおっ！」

虎鉄さんは倒れ、激痛に悶える。

「大丈夫？ ハヤテくん」

涙目になったハヤテが僕に抱きつく。

「私、虎鉄くんが凄く怖かった」

「ハヤテくん？」

「もう良いわよ、私を演じなくても。鷺ノ宮さんから聞いたわ。貴方と私は入れ替わってるんでしょ？」

「ちっ」

僕の舌打ちに応えて、ハヤテがヒナギクさんの体から離れて怪訝そうな顔でこつちを見つめる。

「今の舌打ちは何よ？」

「な……………何でもないわ。人と人が入れ替わるなんて有り得ないわよ。ハヤテくん、ちょっと可笑しいんじゃないの？」

「ん……………、じゃあこうしましょう。貴方がヒナギクであるなら、時計塔の天辺に登ってちょうだい」

「嫌に決まってるでしょ。私が高所恐怖症なの、貴方だって知ってるじゃない」

「そんな……………！ じゃあ私は一体誰なの！？」

「貴方は綾崎　ハヤテ。ナギの執事よ」

「嘘……嘘よ！」

「やっぱり階段から転げ落ちた時に頭を打ったのね」

ハヤテは膝と手を地面に着けた。

「私が……二人に？」

そこへお嬢様がやってくる。

「ヒナギク、何で飛び降り……って、ハヤテの奴どうしたんだ？」

「ハヤテくん、変なのよ。私と入れ替わったとか訳の分からない事を言ってる」

「そうか。よし、ハヤテは私に任せとけ。撮影は中止だ」

お嬢様はそう言って、ハヤテを引きずり去った。

僕は教室に戻って全員に解散宣言をすると、支度をして帰路に就く。もちろん、向かうのはヒナギクさんの家だ。

閑静な住宅街に桂家はある。

ヒナギクさんの家に着いた僕は、ドアを開けて中に入る。

「ただいまー！」

奥の居間から茶髪の若い女性が出て来る。

「お帰りなさい、ヒナちゃん」

この女性はヒナギクさんのお義母^{かあ}さんで、ヒナギクさんが姉と共に両親に捨てられた際に、養女として拾って育ててくれているのだ。

「早いわね。帰りは夕方になるって言ってたじゃない」

「撮影が中止になっちゃったのよ」

「そうなの？」

「うん。それより、お昼食べたいな。お腹空いちゃった」

「あら、困ったわね……」

「どうしたの？」

「ヒナちゃんが帰ってくるとは思わなかったから、何にも用意してないのよ。それに、材料だって無いし……」

「じゃあ良いわ。外で食べてくるから」

「ごめんね。そうしてくれる？」

「うん。序でに晩ご飯のおかずも買ってくるわね」

僕はそう言つて二階へと上がり、ヒナギクさんの部屋に入った。ベッドの上で悪魔が寝ていた。

「ちよつと貴方、何でこんな所で寝てるんですか!？」

僕は悪魔の前で叫ぶように訊ねた。

「うわあああ!」

驚いた悪魔が飛び起きる。

「——つて、お前か」

「こんな所で何してるんですか？」

「お前を待っていたんだ」

「何用で？」

「俺はお前の願いを叶えてやった。だから、お前の魂を迎えに来たのさ」

「そう言えば貴方にお願いしましたっけ。ヒナギクさんになりたいつて。だから入れ替わっちゃったんですね？」

「嗚呼、そうだ。だから、お前を魔界に連れて帰る。そう言う契約だっただろう？」

「その話、無かった事にしてくれませんか？」

「何？」

「契約は破棄します」

僕は正宗を手にとると、悪魔をバラバラに切り裂いた。

「さてと……」

僕はクローゼットを開けて私服に着替えた。そして、街へと向かう。

3・行方不明の男

商店街にやってきた。

辺りを見渡しながら進む。

「やつぱりここかな……」

僕はバイト先の喫茶店……どنگりに入った。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

メイド服を着た雌のハムスター……いえいえ、にしぎわ西沢 あゆむ歩がお辞儀をした。

「何その格好？」

「ああ、今日からメイド喫茶になったんですよ、ここ」

「そんなの聞いてないんだけど」

「何でもマスターの突然の思い付きだそうで、私も吃驚しました。それでは空いてる席にどうぞ」

西沢さんはそう言うが、しかし、店内は満席だった。

「ちよつと！？ 満席じゃない！」

「メイド喫茶になったからそっち系のご主人様やお嬢様で一杯になつてしましまして」

「そう。じゃあ他の……」

言い掛けた所で、僕は懐かしい人を見つけた。

僕は懐かしい人の下へ近付くと訊ねた。

「すいません、ご一緒しても良いですか？」

懐かしい人が振り向く。その人は男で、額に十字傷がある。

「嗚呼、構わない」

「あの、ひよつとして綾崎 イクサさん？」

「そうだが、なぜ知ってる？」

彼……綾崎 イクサは行方不明になった僕の実の兄だ。

「私、ハヤテくんのクラスメイトで、よくお兄さんの話を聞かされました」

「何！？ 君は弟の友達か！」

「はい」

「そうか。ハヤテは元気にしてるか？」

「ええ」

「お兄さん、行方不明だつて聞いてますけど、今までどこでどうなさっていたんですか？」 「行方不明？ 行方不明なのはハヤテの方だが……それに、家には荷物も無くなって……」

「でもハヤテくんは十年前にお兄さんの行方が分からなくなつたつて言っていましたよ？」

「十年前？ 待て、ここはいつだ？」

「二〇〇六年ですけど……」

「何だつて!？」

「あの、何が遭つたんです？」

「嗚呼、実は――」

イクサ兄さんは話した。

行方不明になったあの日、兄さんは突然現れたワームホールに飲み込まれ、気が付いたらこの時代に来ていたと言う。

「――と、そう言う訳だ。……そうか、ここは未来なのか。私は元の時代へ戻れるのだろうか……」

イクサ兄さん……。

僕は向かい側の席に腰掛け、メニューを開いた。

ふとハンバーグの写真が目に入り、何故かそれが食べたくなる。

「歩、ハンバーグセットお願い！」

「^{かしこ}畏まりました。あ、それと私の事はアユちゃんって呼んで下さいね」

「アユちゃん？」

「ここ……どんぐり・メイドでのミドルネームですよ」

西沢さんはそう言って厨房へ入っていく。

僕は閉じたメニューを脇に置くと同時に水が無い事に気付く。

「あの子、水忘れてる……」

「水ならセルフだぞ」

「え？」

イクサ兄さんがカウンターを指差した。その先に冷水器とその横のお盆の上に口が逆さになったコップが幾つか載っていた。

「あ、本当だ」

イクサ兄さんが立ち上がり、水を取りに行った。

「イクサさん？」

「水、飲むんだろ？」

イクサ兄さんがコップに水を注いで戻ってくる。

「そう言えば君とは前にどこかで会ったような気がするんだが……」

「え？」

「私の記憶が正しければ、君はヒナギクじゃないか？」

「……！？」

僕は驚いた。

「ここが十年後だとするならば、君は十年前に潮見の不良と喧嘩してたな」

そんな話は初耳ですよ、ヒナギクさん。そう思った刹那、僕の脳裏に潮見高校の男子生徒数人と幼少期のヒナギクさんが喧嘩しているシーンが過った。

多勢に無勢、圧倒されるヒナギクさん。しかし、それでも彼女は戦う。

そこへ現れたのは、イクサ兄さんだった。

「一人の小さな女の子を数人の大きなお友達が虐めるのはどうかと思っぞ？」

振り返る不良たち。

「げっ、お前は綾崎！」

「おい、やべえぞ！ 逃げろ！」

不良たちはイクサ兄さんの顔を見るなり慌てて逃げていった。

「大丈夫か？」

イクサ兄さんが姿勢を低くしてヒナギクさんに目線を合わせる。

『べっ……別に助けて欲しいなんて頼んで無いんだからね!』

そう言って頬を赤らめるヒナギクさんは本当に素直じゃないな。

イクサ兄さんはヒナギクさんの頭を拳で小突いた。

『痛!』

痛みに顔を歪め、涙目になるヒナギクさん。

『いきなり何するのよ!?!』

『女の子が喧嘩なんかしちゃダメだろ』

『貴方には関係無いでしょ!?!』

『それもそうだ。もう喧嘩するなよ? じゃあな』

そう言って立ち去ろうとするイクサ兄さんを、ヒナギクさんは引き留めた。

『待って。貴方、名前は?』

『名乗る程の者じゃないさ』

その言葉に苛ついたヒナギクさんはイクサ兄さんの金玉を蹴り上げた。

『うつ!?!』

イクサ兄さんが激痛に顔を歪めた。

『名乗らないと金玉蹴るわよ?』

『蹴ってから言うなア!』

『で、何て名前なの? 言わないとぶっ飛ばすから』

『数人の不良に圧されていた君がそんな事を出来る訳が……って、ああ!?!』

次の瞬間、イクサ兄さんは宙を舞っていた。

『ぐは!』

地面に落下して転がるイクサ兄さん。

ヒナギクさんは横たわるイクサ兄さんに近付いて言う。

『名前は?』

『イクサだ、綾崎 イクサ』

『イクサ? 何か格好良くてム力つくわね。……フナムシ』

『フナムシ?』

『貴方の名前よ。私は桂　ヒナギク。覚えときなさい』
『嗚呼、覚えねえ』

『何ですって？』

ヒナギクさんが顔を顰める。

『生憎、君みたいな性格の悪い子は大っ嫌いなんですね』
立ち上がるイクサ兄さん。

『今後、君とは一切関わらない事にするよ』

じゃあな――と、立ち去るイクサ兄さん。

『ちよつと待ちなさいよ！』

ヒナギクさんが脱いだ靴をイクサ兄さんの頭にぶつけた。

『痛！』

振り返るイクサ兄さん。

『物を投げるな！』

『明日の昼間、負け犬公園に来なさい。この私がお礼にデートして上げる』

『お断りだ』

『何でよ！？』

『さっき言っただ様に私は性格の悪い子が嫌いだ』

ヒナギクさんはイクサ兄さんに飛びついた。

『うわっ！？』

イクサ兄さんはバランスを崩して尻餅を着いた。

『ねえ、イクサ。私の彼氏になつてよ』

『はあ？　何言つてんだお前』

『私、イクサの事が好きになつたの』

『私はお前が嫌いだ。あっちへ行け』

『そんな事言わずにお願い。どうせ付き合ってる彼女も居ないんでしょ？』

『居るさ』

『え？』

『じゃあな』

イクサ兄さんはヒナギクさんを退かすと今度こそ本当に立ち去った。

一人残されたヒナギクさんは呆然と立ち尽くし、それと同時にその映像が脳裏から消え失せた。

「それにしても君はあの時と変わらず可愛いな」

「あ……有り難う。それで、彼女って誰なんです？」

「気になるのか？」

「ええ、とつても」

「水色の長い髪の子だ」

「名前は？」

イクサ兄さんは恋人の名を口にした。それに僕は驚きを隠す事が出来なかった。

「ほ……本当にその人の事が？」

「嗚呼、好きだ。出来れば逢いたい」

「分かりました。その人に逢わせて上げます」

4・タイムスリップ

メイド喫茶に生まれ変わったどんぐりで昼食を済ませた僕は、イクサ兄さんを連れて桂家に帰ってきた。

玄関でお義母さんが訊ねる。

「お帰り。その男の子はヒナちゃんの彼氏？」

「違うってば！ この人はハヤテくんのお兄さんよ！」

「へえ、ハヤテくんにはお兄さんが居たの？ 初耳だわ」

「それより、お姉ちゃん居る？」

「うん、さっき帰ってきたわ。京くんと一緒に」

「そう。じゃあお姉ちゃん呼んで来るから、お義母さんはイクサさんを私の部屋に案内しといて」

僕はそう言って離れに向かった。

「お姉ちゃん、ちょっと来て！」

僕が離れのドアを開けると同時にそう言つと、水色短髪の女性が出て来た。

この女性がヒナギクさんの姉である。

「何よ？」

「お姉ちゃんお客さんが来てるの」

「お客さん？」

「私の部屋に居るわ」

僕はお姉さんをヒナギクさんの部屋へ連れて行った。

「イクサくん！？」

イクサ兄さんはお姉さんを見て疑問符を浮かべた。

「誰だ、この小母さん？」

「小母……！？」

「イクサさん、この人は雪路お姉ちゃんよ」

「雪路だと！？ こいつが！？」

「ヒナ、これどういう事？」

「イクサさんは十年前から来たのよ」

「タイムスリップ!? そんなまさか!」

僕はお姉さんに気付かれない様に部屋から出ると、そっとドアを閉めた。

その時、階下からお義母さんが上がってきた。

「あ、お義母さん」

「イクサくんにおレンジジュースを持ってきたの」

「二人の邪魔はしちゃダメよ」

僕はお義母さんを回れ右させると階下に移動させた。その直後、兄さんが下りてきた。

「あ、イクサさん」

イクサ兄さんはしょぼりとしていた。

「どうしたんですか?」

「あの人、結婚してたのか……」

「……ねえ、イクサさん。散歩でもしませんか?」

「嗚呼……」

僕とイクサ兄さんは家を出た。

僕の足は白皇学院へと向いていた。

「イクサさん、もしかしたら元の時代に帰れるかも知れませんよ」

「本当か!?!」

「これから向かいます」

僕はイクサ兄さんと共に白皇の理科室を訪ねた。

理科室では眼鏡をかけた白衣の女性……まきむら牧村 しおり詩織が何かを作っていた。

「牧村先生」

牧村先生が顔を上げた。

「あら、丁度良い所に来たわ。今ね、ベルト型のタイムマシンを作ってたの」

牧村先生がダイヤルの付いたベルトを渡してくる。

「このダイヤルをメモリに合わせて横のボタンを押せばタイムスリ

ツプが出るわ。丁度二本あるから二人で動作テストしてみて」
そう言って牧村先生がもう一本をイクサ兄さんに渡す。

「イクサさん、これで十年前に」

「嗚呼！」

僕たちはダイヤルを十年前に合わせると、ボタンを押してその時代へタイムスリップした。

「ここが十年前……」

ふと足下に違和感を覚えてそこを見ると、僕たちは浮いていた。

「これってひよつとして？」

「ひよつとしなくても落ちる——っ！」

僕たちは重力に従って落下した。

「痛！」

僕は見事に尻餅を着いた。しかし、イクサ兄さんは巧く着地していた。

「何で校舎が無いんだ？」

「この時代に白皇の新校舎は無いんです。それより、早くアパートへ行きましょう？」

僕とイクサ兄さんはこの時代の僕が住むアパートへ向かった。

「イクサさん、一つ忠告しておきますね。今から十年後、両親が一億五千万の借金を残し、ハヤテくんを置いて逃げて行きます」

「そうか」

「じゃあ私はこれで」

僕はダイヤルを調節して元の時代へ帰還した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7733/>

ヒナギクさんが僕で僕がヒナギクさんで

2010年10月10日14時06分発行